

七月二〇日「月面着陸記念の日」人類われら地下を
さまよう 谷岡亜紀

米国のアポロ十一号が人類史上初の月面着陸をはしたの
のは、一九六九年七月二〇日。月面をのるの歩く船
長ニール・アームストロング。三十歳だった私はテレビ
中継を見た記憶がある。下句、読者がどんなイメージを
描いてもOK、そういう作られ方がされている。例えば
東京駅地下街のような人の多い地下街をイメージして、
あの広々とした月面の映像と対比するのもいいだろう。

陽炎の向こうより子の帰ってきてシャボン生みつつ今
日の話を 駒田晶子

上句のはじまり方のドラマティックな感じがなかなか
いい。「陽炎」は春の季語だから、読者は春の広々とし
た地平を思い浮かべる。ただ「シャボン生みつつ」はや
や無理か。石けんで泡を生みつつ手を洗いながら、学校
のことをしゃべっているの意味だろう。「泡を生みつつ」
が普通と思う。

熱海の手再び見ることかなはざり石川先生吉備中央
町に死す 大熨允子

石川不二子さんへの挽歌。石川さんは、認知症をわず
らっておられたらしく、長く、だれとも連絡がとれない
できた。ストレートの髪で、長身の女性だった。

石川さんは藤沢に生まれ、熱海で育った。高校時代か
ら信綱に直接、作歌を指導されたらしい。「短歌研究」
五十首詠で中城ふみ子が特選のときに次席となり注目さ
れるようになった。東京農工大を卒業後、同窓の仲間と

短歌の現在

No.474 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

島根県の東ノ原農場に入植、後に岡山県に移り、ずっと
農業をつづけておられた。石川さんが亡くなられ、信綱
に直接会った人がいよいよ少なくなってきた。

神戸一人気のバームケーキ屋に黒い紗を着た僧侶の
並ぶ 小島千佳

東京や大阪ではなく、神戸だからだろうか、何か物語
がはじまりそうな雰囲気がかもし出されている点に注目
する。一読、記憶に残りそうな一首。

感染の器材を入れたビニールは曇れりウイルスの息
するごとく 高橋 秀

新型コロナウイルスで超多忙な医療従事者としての一
首。診察にせよ診療にせよ、感染者にかかった器材は、
注意深く搬出されるのだろう。下句、「ウイルス」とい
うイキモノッポイ不思議をイメージ化して鋭い。

見送れば五歩ごとに振り返る君あるいは自死せし若
き俳優 岸並千珠子

三浦春馬の自死を歌にして、タイムリーな取材、工夫
された表現に感心した。ただ、こういう歌は賞味期限が
ある。来年の今ごろになると、どれぐらいの読者が読み
込むことができるか。時事的題材を持ちこむときの、こ
こは、大きな問題と思う。

遠雷に左右の耳をピンと立て鼓動は徐々に速まりて
ゆく 清水春美

たいていの犬は、雷と火花が嫌いである。音がどうに
も苦手らしい。人間の耳では聞きとれないくらい微細な
遠雷も感知して、しげんに震えてしまいうらしい。わが家